

Title	民国期中国における知識人の「新式結婚」とその後：趙元任・楊步偉夫妻を例として
Sub Title	"The new style wedding" and married life of the intellectuals in the republic of China: the case of Yuanren Zhao and Buwei Yang
Author	藤井, 敦子(Fujii, Atsuko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2008
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.94, (2008. 6) ,p.222(145)- 241(126)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	西脇順三郎没後25周年記念号
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00940001-0241">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00940001-0241</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 民国期中国における 知識人の「新式結婚」とその後

——趙元任・楊步偉夫妻を例として——

藤井 敦子

## 1 はじめに

趙元任（1892年–1982年）は、語学研究の大家として広く知られている。趙は、清末民初にアメリカに留学し、数学、物理、哲学、言語学と文理にわたる幅広い学問を身につけ帰国、その後、家同士で取り決められた婚約を解消し、日本で医学を学び帰国して医院を開業していた医師の楊步偉（1889年–1981年）と恋愛結婚をした。二人で撮った結婚写真は新聞に掲載され<sup>1</sup>、「新人物の新式結婚」として大々的に報道されたという話はよく取り上げられる。しかし、その後の二人の家庭生活について言及したものは、管見の限りまだない。

清末から民国初期にかけて、知識人青年たちの間で、伝統的家族制度を打ち破ろうとする声が高まり、1920年代に入ると、五四新文化運動の流れをくみ、男女平等、自由恋愛の受容、親や家同士の間で決められた婚姻制度への反発のみならず、儀式そのものの習俗の簡素化を求める声が上がってきた。自由恋愛や知識人の結婚に関しては、（張、1995）、（坂元、2004）等多数の先行研究があるが、その後の個々人の具体的事例を扱ったものは少ない。趙元任と楊步偉に関しても、結婚以後、楊は医師をやめて家庭に入った<sup>2</sup>とのみ書かれることが多い。はたして、その実態はどのようなものであったのだろうか。

本稿では、言語学者趙元任とその妻楊步偉の「新式結婚」とその後の家庭生活にスポットをあて、新人物と謳われた二人の生き方を辿り、主に妻楊步偉の行動に着目しながら、民国時期の知識人夫婦のあり方について考察したい。

## 2 言語学者と医師——それぞれの半生

### 1) 趙元任

趙元任は、1892年天津で生まれた。生家は代々進士を輩出した名門で、宋の趙匡胤の子孫という説もある。1900年、一家は常州青果巷に移る。1907年に、元任は南京江南高等学堂予科に入学、英語、ドイツ語等の外国語学習に強い関心を示し、また音楽や各地の方言をマスターした。1910年には、清政府「遊美学務処」が募集した庚子賠款<sup>3</sup>官費生に胡適らとともに合格、その年の8月、アメリカのコネル大学に入学した。大学での専攻は数学で、物理、哲学、音楽を副専攻とした。1914年に大学を卒業すると、同年、コネル大学の同級生である胡適、胡明復、楊杏佛ら数名とともに中国科学社の立ち上げに参加し、月刊誌『科学』を創刊した。その後、以前より関心を深めていたラッセルの哲学に関する論文を発表、ハーバード大学の哲学奨学金を得、ハーバード大学大学院に入学し哲学を専攻する。1918年に哲学博士の学位を取得、1920年8月、アメリカから中国に帰国し、清華大学で教鞭を執ることになる。同年10月、梁啓超、張東蓀らの招きに応じ、ラッセルが中国を訪問し一年にわたり講演活動を行ったが、ラッセルは非常に広範な学術領域を有し、彼が成果を収めた数理論理学の分野だけでも、数学や現代物理等多方面の内容が含まれていた。当時の中国で、十分な哲学の素養があり、あわせて数学、現代物理に通曉し、同時に中英2ヶ国語に精通した通訳を探し出すことは至難の技であったことだろう。ラッセルの来華講演の準備のため、梁啓超らは「講学社」を特別に組織し、みなを推薦により、清華大学の招聘により帰国し教員となることが決定していた趙元任が通訳として選ばれたのである。こうして、趙は10年間にわたる海外留学を終え

て北京に戻った。

## 2) 楊步偉

楊步偉は、1889年南京で生まれた。楊の生家も地元で有数の名家で、曾祖父は曾国藩と共に進士に合格した官吏であり、祖父の楊仁山は、清国の駐英国欽差大臣の参贊を務め、後年は仏教研究のかたわら革命運動を支援し、教育の普及のため学校の設立等にも力を入れた。祖父は自宅に仏教研究所を開き、仏教研究者としてその名は広く知られ、知識人たちの出入りも多かった。楊はそのようなアカデミックな環境の下で育った。両親は健在であったが、生後まもなく、子どもがいない次男夫婦の養子となった。1896年、家庭内の塾に入り「三字経」や「女兒経」、地理、数学等を学ぶ。1906年に、南京の「旅寧学堂」に入学し、祖父から楊韻卿という学名を与えられる。同室の林貫虹と親友になるが、林はアヘン戦争時に活躍した林則徐の孫娘であった。その後、上海に転校した林の影響もあり、南京から上海中西女塾に移るが、キリスト教への入信を求められ中退、南京の自宅に戻る。その頃、林貫虹により楊も同盟会の会員に登録されている。1911年に林貫虹が猩紅熱で死亡すると、林を悼み、彼女がつけてくれた楊步偉という名に変える。1912年には「崇実女子中学」の校長を務め、同年日本へ渡る。1914年、東京女医学校へ入学<sup>4</sup>。1915年に、在日の留学生は「二十一ヶ条条約」反対運動を起こし、鉄血団を組織して集団で帰国するも、楊步偉は「今帰国しても国の役には立てない」との思いから帰国せず、李韻嫻、馮啓亜、朱徴らの仲間とともに引き続き勉学に励んだ。1918年に卒業後、北里研究所等で実習を行っていたが、1919年5月、北京で娘の開業を準備していた養父が突然亡くなると、楊は急遽帰国し、李韻嫻とともに医院の開業準備に入った。そしてその年の9月、北京の前門内に産婦人科と小児科の医院を開業する。その名は「森仁医院」<sup>5</sup>といい、若い女性医師が開いたということで注目され大変な盛況ぶりだったようである。

それから一年後、アメリカから帰国した趙元任と楊は出会うことになる。

### 3 知識人同士の「新式結婚」

二人の出会いについて、趙は回想録の中で以下のように述べている。

ラッセルの通訳を始める数年前から、あることが私を悩ませ、時間を奪っていた。それは通訳をするよりずっと厄介なことで、つまり私が江陰の娘の陳儀庄（音訳）の許婚であるという事実だった。この娘に私は会ったことがなかったが、私の家の者が、私の両親が亡くなった際結婚の約束を交わしたのだった。9月18日の午後いっぱい、私は「国語統一委員会」の会議に出ており、会の後遅くなり清華に戻れなくなってしまった。城門はすでに閉まっていたので、私は龐家にいった。従兄弟の龐敦敏は私の育ての母の息子で、彼の妻織文は、私が五哥と呼んでいる叔父の馮聃生の娘だった。その晩、彼らは盛大な宴会を催しており、お客の多くは中央防疫局員と留日医学生と同級生だった。馮聃生叔父もそこにおいて、私の婚約解消費におよそ2000元が必要だということが、話の種になっていた。これは必然かまたはまた偶然か、その晩私は五哥と敦敏の日本での留学仲間である李貫中（筆者注：李韻嫻）と楊韻卿（筆者注：楊步偉）、二人の女医に出会った。一中略—私は日記に、この二人の女医が100%開けた考えの持ち主であり、楊医師も家で決められた許婚がいたが、彼女自身により婚約が解消されたのだった、と記した。（趙、1997、p. 156-157）

私と楊韻卿の恋愛関係は深まり、早急に私のかねてからの懸案を解決しなければならなくなった。私の叔父馮聃生と大叔父趙竹君が中に入り、男性側が女性側に「教育費」として2000元支払うことで双方が同意した。私はそのために南方に赴いた。一中略—「教育費」を叔父に渡し、正式に婚約を解消した。滬寧鉄道を何度も往復し、車内の乗務員とは4度も顔を合わせた。北京に戻り、自由の身

になった私は彼女に会いに行った。婚約を取り決められた日からおよそ二十年たち、私は初めてこう言える。「私は自分自身のものだ。」  
(趙、1997、p. 163)

二人は、ともに物心つかない頃より旧式結婚が用意されていたが、それを自らの意志で解消するという共通の経験をもっていた。また、両者ともに大きな志を抱いて海外へ留学し、見聞視野を広め学問を修めた後に帰国した。このような背景をもつお互いへの共感が、結婚へと結びつく大きなきっかけとなったといえるだろう。

趙元任と楊步偉は、1921年6月1日、こうして結婚した。趙のコーネル大学留学時代からの親友である胡適は、二人の結婚の日の様子について、日記に以下のように記している。

#### 簡単かつ近代的な結婚式

趙元任と楊步偉女史（仁山氏の孫娘）は今晚私を食事に招いた。彼らは長いこと相思相愛の仲で、今日から、ともに小雅宝胡同49号に引越し、終生の伴侶となったが、私と朱徽女史をその証人として招いた。彼らは結婚証書を作り、食後、我々は各々証人の署名をした。結婚証書は中国語と英語2ヶ国語で以下のように記した。

下記に署名した趙元任と楊步偉は、相互の感情及び信用の度合いが、その無条件の永久的存在を裏付けるものと確信し同意するものである。

こうして両名は本日、十年六月一日、西曆一九二一年六月一日、終生の伴侶となった。

ここに親友二名が署名し証人となる。

本人署名：楊步偉、趙元任。

証人署名：朱徽、胡適。

これは、世界で——中国のみならず——最も簡単かつ近代的な結婚式であろう。(胡、2004、p. 70-71)

二人は、友人たちに以下の通知書を送り、結婚報告に代えた。

この通知が届く頃、私たちは1921年6月1日午後3時東経120度平均太陽標準時において結婚しています。以下の二つの例外を除いて、お祝いは決して受け取りません。一つは、手紙、詩文、あるいは楽曲等で、もう一つは、中国科学社への募金です。(趙、1997、p. 165)

二人の結婚は、翌日の『晨报』で「新人物の新式結婚」と写真入りで大々的に報道された。二人がともに親に決められた相手との結婚を拒み、海外留学の後、自由恋愛によって結ばれたこと、また儀式や祝い金等を一切省くといったスタイルが、当時の知識人青年たちの注目を集めたのだった。二人はこのいわゆる「新式結婚」を通じて、封建的家父長制度への批判や、個人の独立尊重という自分たちの主張を表現しようとしたのである。

しかし、現実には理想通りにはいかず、また、みながそのスタイルをまねできたわけではなかった。

まだ厄介なことがあった。それは、私たちは二人とも革新的な人物であると自負しており、一切のこまごました煩わしいしきたりを捨て去ってこそ自主的な結婚であり、すべての人に日時を知らせずご祝儀も受け取らないと考えていたが、(筆者注：北京大学教授の)任叔永に、二名の証人を立てなければ正式な結婚とは認められないと言われたので、我々は胡適と朱徵の二人にサインしてもらい手続きを終えたが、出国まであと二ヶ月以上あったので、小雅宝胡同四十九号に仮住まいするしかなく、また結婚通知書に、以後友人や親戚を招いてパーティーをすると書いたもので、その通りにしなければならなかった。

まず最初に北京の科学社の会員を呼んだ。その次に、元任と同じところに数ヶ月住んでいたラッセルとブラック女史を招いた。その後続いて両家の家族や親戚を招いた。当時『晨报』では新人物の新式結婚と称されたが、今思うとやはりなかなか面倒であった。(楊、1985、p. 2)

若者たちは我々の結婚式に倣おうとしたが、実際に同じようなケースはなく、我が家の4人の娘たちもその例に漏れなかった。彼女たちの結婚式は我々の結婚のように簡単なものでは到底なかったのだ。(趙、1997、p. 165-166)

「新式結婚」をした二人であったが、楊は結婚後、自分の医院を、二人の結婚の証人でもある朱徴に託し、趙とともに渡米する。様々な経緯<sup>6</sup>があったにせよ、あれほど熱心に学んだ医学の道から退き、創立したばかりでこれからという自分の医院を譲って趙元任との結婚に踏み切った楊は、その後の家庭生活の中で、どのように自分の居場所を見つけていったのだろうか。

#### 4 家庭生活の中で

結婚後、趙元任の職場の移動等にもない、家族で中国、アメリカ、ヨーロッパを行き来する生活が始まった。時期別の滞在場所、趙の勤務先は以下の通りである。

1920-1921年 中国・北京；清華学堂、ラッセルの通訳として国内訪問先と同行

1921-1924年 アメリカ・ケンブリッジ；ハーバード大学

1924-1925年 イギリス、フランス、ドイツ、スイス等ヨーロッパ探訪<sup>7</sup>

1925-1928年 中国・北京；清華学堂国学研究院<sup>8</sup>



1928-1932年	中国・北平；中央研究院歴史語言研究所 <sup>9</sup>
1932-1933年	アメリカ・ワシントン；清華留美学生監督処
1933-1938年	中国・北平、上海、南京、長沙、昆明；中央研究院 歴史語言研究所
1938-1973年	アメリカ；イエール、ハーバード、ミシガン、カリ フォルニア大学等

1921年6月に結婚して以降、楊はほぼ常に趙と行動をとともにした。

ここでは、主に1921年から1938年までの、結婚後のアメリカ滞在から帰国後の民国期中国で過ごした日々を中心にみていきたい。

二人は結婚の翌年に渡米したが、当初、趙は結婚後も妻に医師の仕事を続けさせたいと考えていた。彼は中国に帰国してはいたが、コーネル大学を休職中の身分であったのでアメリカに戻ることが決まっていた。しかし、彼女が医師の仕事が続けるならば、コーネル医学院は趙の勤務地であるイサカにはなかったため、コーネルではなく、近くに医学校のあるハーバードに行くことにした（趙、1997、p. 166）のだった。

妻の仕事のことを考え、自分の職場を移動しようとした夫以上に、楊自身も渡米後医業に従事したいという気持ちが強かったが、渡米直前に妊娠がわかり、その後は計画を変更し育児に従事することになったのである。

### 1) 知識人の妻の悩み

楊は、専門である医学の道からはいったん退いたが、1922年に長女如蘭を、翌年に次女新那を出産すると、自身の関心のおもむくままにアメリカでの新生活を謳歌しようとしていた。趙も、「娘は父親が育てたようなものだ」、と楊が後に語っているほど、幼い娘たちの面倒を見たり料理を作ったりと、家事・育児に積極的な姿勢を見せていた。しかし楊は、医師として働いていた以前の日々との比較から、自分がおかれている状況について悩み、心の葛藤を垣間見せることも多々あった。

私はアメリカに来てから勉強もせず、ただ子どもを産んで女中の  
ようなことしているだけで、本当に意味がないと感じていた。やは  
り早く帰国したほうがいい、(筆者注：ハーバード大学の) 中文学  
科が正式に設立したら、申し訳ないけれどすぐに戻ることにしよう。  
(楊、1985、p. 21)

これより少し後に、やはり知識人同士で結婚した林徽因も、結婚後職  
を持ちながらも同様の悩みを抱いていたようだ。

私自身も既にもうそれなりの年齢ですが、まだ何も達成しないう  
ちに機会の方は益々少なくなっていくばかりです。——わたしは激  
情型の人間で、突然のインスピレーションや何か大きな力に啓示を  
受けて仕事をします。目下、わたしは健康がすぐれないところへ家  
事の負担もあって、本当にこれからずっと、ありきたりの毎日を送  
り、妻として子を産み育てるだけで一生を終わるのではないかと思  
うと、恐ろしくなります。<sup>10</sup>

これについて西川氏は、生来の天分と教育の機会に恵まれ、知的な欲  
求を妨げられることなく生きてきた林徽因にとって、知的創造を伴わ  
ない日常など考えられなかった、そのような生活は無味乾燥であるだけ  
でなく、自分自身の怠惰さえ意味した、と述べている。

楊步偉は、林とは異なり自分の仕事をすべて放棄して、夫についてア  
メリカに渡った。異国の地におけるその不安と焦燥は、より一層大きか  
ったことだろう。アメリカで始まった新生活は、楊の葛藤の日々の始まり  
でもあった。

## 2) 医学関連の活動

家事と育児に慣れてくると、楊は少しずつ専門の医学に関する活動を

再開し始めた。アメリカ滞在も3年目を迎えた1924年には、当時アメリカ国内だけでなく、日本、中国にも大きな影響を与えていたサンガー夫人の産児制限運動に共鳴し、その著書を翻訳している<sup>11</sup>。

二人は各自自分の仕事に励んだ。元任はもちろん多忙であった。上に記したように、彼はひたすら研究に没頭するタイプの間人だからだ。私はというと、元任に勧められ翻訳を始めた。サンガー夫人の、彼女は産児制限の専門家だが、私は彼女の書いた“*What Every Woman Should Know*”を『女性須知』と訳した。よくわからない英語の文章についてたびたび元任に尋ねたが、元任は辞書を引けば覚えるのにと言った。私は、そんなに時間がかかることなら私はやらない、生き字引をここに置いて聞けばすむことじゃない、と答えた。—中略—この小冊子は、商務印書館から出版された。<sup>12</sup>（楊、1985、p. 16-17）

1924年5月、ハーバードでの滞在を終え欧州訪問に向かう際には、趙が北京語のレコードを録音するために立ち寄ったニューヨークでサンガー夫人と面会し、産児制限について意見を聞き、計画出産と人口抑制運動を推進するよう夫人から強く勧められた。楊自身もそういった仕事を専門に行ない、貧困者を助けたいと考えており、その後、1年間の趙の欧州訪問（1924年6月～1925年5月）に同行し、実際に産児制限運動に関する調査ができたことは、当時の楊にとって大きな意義をもったと推察される。

我々はベルリンで多くの医師を訪ね、産児制限の方法について調査した。アルミニウムのカバーを子宮口にかぶせる、グリセリンを染み込ませた綿を入れる等々。だが、それも100%の保証はない。また、中国の農村でこんなことができるはずもない。今に至るまで、やはり手術が一番信頼できる。（楊、1985、p. 30）

当時ドイツでは中国人留学生が多数学んでいて、楊自身も学生時代はドイツに留学し医学を学ぼうと考えており、日本に留学し医学を学んでいた頃もドイツの医学事情への関心は高かった。

欧州訪問を終え帰国した1925年の冬には、産児制限運動を推進するため北京城内の景山東大街に診療所を開き、週に2回ほどではあったが清華大学構内の家から街へ出て、計画出産に関する避妊処置等の診療も行った。

私という人間は家の中で安穩としてはいられない性分なのだ。何をしてたかという、清華園は田舎なので何もすることがなく、たまに同僚の夫人たちの小さな病気を見つけてあげたりしたが、それも顧問のようなもので（なぜなら、大きな病気は校医の担当だったから）毎週一度は必ず人力車で街へ出かけた（夫人たちの中には永遠に街へ出かけない人もいた）。しかし、冬はひどく寒く、私は街へ出かけるのがつらくなったので、市内に診療所を開き、産児制限を専門に行なおうと思いたった。一中略—その当時の政府はこの名目を禁止していたが、私が街へ行き胡適や夢麟らに相談すると、彼らはみな賛成してくれ後ろ盾になってくれるときえ言った。私は、少なからぬ出資金が必要だと思った。なぜなら、産児制限は、貧しい人々が最も必要としていることだからである。（楊、1985、p. 45-46）

サンガー夫人は、1922年に初めて中国を訪れた後も何度か講演のため再訪していたが、楊歩偉も1926年の訪問時に夫人と再会することができた。

そのころ、サンガー夫人がちょうど中国に到着し、胡適は多くの人々を招いてもてなした。我々は主要な客であったので、世間の人々の注目を集めた。私の目的は貧しい人々を救うことなので、サンガー

夫人に、中国は貧しい人々が多く病院が少ない、こういう事業を行なうには、多額の資金が必要で政府主導でやらなければ実行不可能だと言った。一中略—この後、次々と警察がやって来て取り調べが行なわれた。産児制限はひそかに人口を減少させる、大逆不道のことである、と。一中略—一面倒なことが多くなった。元任は胡適と相談し、胡適は私たちを食事に招いて、私にやはり診療所を閉じたほうがよいと勧めた。(楊、1985、p. 53)

この時期、北洋軍閥の段祺瑞政府に反対するデモが北京でも頻発していたが、1926年3月18日に北京の天安門に五千名以上が集結したデモで負傷した者たちが病院に駆け込み、楊がその治療を行なっていると、抵抗勢力をかくまうな、関係者か、と取調べを受けたりし、また政情が不安定な中で誤解を招くような活動は避けねばならなかったことから、楊の医師としての活動は休止を余儀なくされたのだった。

こうして診療所は閉めることになったが、診療と並行して行なっていた産児制限に関する講演活動はその後も続けた。

私は産児制限の仕事を中心に行なった。清華園という小さな場所ではそれほど広がり期待することはできなかったが、婦女会や、教職員会、母親会などに呼ばれて何度か講演をした。北京市内の女子青年会、婦女会もよく私に講演の依頼をした<sup>13</sup>。しばらくして林語堂夫人と知り合ったが、彼女も私の活動を支持してくれ、更に彼女のいるアモイでも講演してほしいと言った。(楊、1985、p. 49)

1928年9月、趙の勤務先が清華国学研究所から国民政府直属の機関である中央研究院歴史語言研究所に移動したのにもない、一家で北平市内に引越し、1929年6月に楊は三女来思を出産したが、その後間もなく女子大学で生理学や解剖学等の講義を始めた。

私は北平の市内に移ってからというもの、まともな仕事もやった。それは、高梓が私に女子大学で体育学部の生理学と解剖学を教えるよう求めたからだ。一中略—私は授業以外にも、学生たちを協和医院での死体の解剖実習に連れて行き、各部の筋肉や皮膚、神経・血管等の部位や、負傷した後、どのように救急治療をすべきか見学させた。なぜなら、当時は自由に見ることができる死体がなかなか見つからず、協和医院が医学校の学生たちのために残しておいたものを借りて見るしかなかったからだ。(楊、1985、p. 65)

1931年5月に四女小中を出産するが、その出産の数日前まで楊は大学での講義を続けた。身重の体で立っている時間が長過ぎたため、出産後体調を崩ししばらく入院していたというが、その姿からも、医学に関連する仕事に従事することこそが自分の使命であると考え、大きなやりがいを感じていた楊の強い思いが伝わってくる。

### 3) 社会活動、その他

清華にいた時期(1925年9月～1928年8月)には、「三太公司」という手芸教室を開いたり、「小橋食社」と名づけられた食堂の管理に従事したりしたこともあった。

清華の家にいる間は、することがなかったので、私たち三人の夫人(筆者注:太太)は「三太公司」(他の人がつけたあだ名)を組織し、近所の少女たちをたくさん集めて様々な手芸を教えた。というのも、私はアメリカ、イギリス、ドイツなどを訪れた際、至る所で多くの各種手芸見本を収集していたからだ。北京で有名な「大鐘牌舗子東升祥」まで私にいくつか見本を借りられないか尋ねてきたほどである。ボタンかがりや、アップリケ、シーツにテーブルクロス、ハンカチなど、当時は人々が買いに来たり、お店に卸したりしたが、現在でも、清華園、西山、海淀の一带では、これらの手芸品を作るこ

とができる女性が数多くいる。(楊、1985、p. 46)

私はまたもやアイデアを出した。数名の夫人たちと相談し、共同で数名の腕利きのコックを雇い、点心を作る者、料理を作る者に分け、そして我々が各省のさまざまな料理と点心を彼らに教えて作らせれば、非常に多くの種類のもが食べられるのではないかと考えたのだ。家でもコックを雇う手間が省けるし、お金も元金以外は三間小屋の賃貸料とコックの給料を出すだけなので、順番に一人の夫人が管理するというので、皆が賛成した。(楊、1985、p. 47)

このような活動に類似するものは、その後1932年から1年間の、趙のワシントンの清華留美学生監督所赴任時や、その帰国後、中央研究院の北平から南京への移転にともない転居した時期(1934年)にも散見される。また、1936年12月以後は、後方支援にも力を入れた。

当時はまだ女性が従軍することができなかったが、我々にはできる限りの義務を果たす必要があった。そこで、個人の団体を各々組織し、軍隊を慰問した。冬、軍人が外で飢えと寒さに苦しめられていることを思い、綿入れを作って彼ら前線の兵士たちを慰問したため、我が家はまたもや大本営と化した。我が家は人の往来が激しいので、来る者みなにお金を出し力を貸すよう頼み、綿入れを作ったのだが、思いがけずみなわれ先にと参加したので、すぐにその数は二、三十人になり、みなで分担して材料を買い、終日ミシンの音が鳴り止まなかった。おしゃべりしながら作っていたが、あつという間に170着もの綿入れが出来上がった。(楊、1985、p. 94)

以上のように、家庭に入ってからもお、楊は専門の医学関連の仕事のみならず、社会活動にも精を出し、積極的に社会とのつながりをもっていたことが明らかになった。しかし、「私はあれもこれもと手を出す

のが好きだが、すべて最後までやり遂げられなかった。ただ、その多くは想定外のことに出くわし、やむをえず中止したのだ」（楊、1985、p. 52）と自ら語っているように、趙の勤務先の移動やかねてからの政情不安などにより、活動は短期間に限られることが多かった。そのため、自分の思い通りの働きができないというジレンマが常にあったようだ。とりわけ、楊の医学に対する愛着と、一生をかけて従事することができなかったという無念の思いは、『雑記趙家』全体を通じて伝わってくる。

女兒たちの教育にも熱心に取り組んだ楊だったが、次女新那が医学を学ぶべきか化学を学ぶべきかと進路に悩んでいた際、自らの経験を踏まえ、次のようなアドバイスをしている。

「まず、医学は学ぶのに時間がかかるし、実際、女性が医師になっても仕事と家庭を両立するのは難しく、家庭の主婦にはふさわしくない。私がおのいい例だわ」（楊、1985、p. 134-135）と。新那はその助言を受け、化学を専攻することにしたという。

また、楊は何かにつけて医師時代の体験や思い出に結びつけて言及している。「料理だけでなく、何事も同じことだ。準備不足だと、その場しのぎの出来合いのものになってしまう。時間もかかり、本人も焦る。私が医師として働いていた時のように、頭の中がきっちり整理されていなければ、手術が成り立たないのと同じことだ」（楊、1985、p. 160）といったように。

以上からも、楊の、医師という職業への思い入れの強さがうかがえる。

一方の趙は、「教育部国語統一準備委員会」<sup>14</sup>の委員として、国語ローマ字の導入に積極的に携わり、また国内外の調査に赴き、多数の著書を記したが、方言調査で地方に赴く時にはたびたび楊も同行した。楊は、自分が生来活動的で好奇心旺盛、そして新しいもの好きであると自認しており、方言調査に同行することで多くの新しい知識を得て、本当に興味深かった、と当時の様子を述懐している。

1938年に中国を離れ、一家でアメリカに渡った<sup>15</sup>後も、趙は精力的に研究活動を続け、『漢英大辞典』の編集長、アメリカ言語学会会長、言



語学研究所教授等を歴任した。英文著作には『中国語字典』、『粵語入門』、『中国語語法の研究』、『湖北方言調査』等多数あり、言語関係のレコードを録音制作し、華中と華南各省の方言の録音レコードだけでも2000枚以上はあるという。趙の活躍を間近に見る楊の葛藤を、趙も感じていたに違いないが、双方の思いについては詳しく言及されていないため、想像に頼るほかはない。

しかし、楊は診療こそ行なうことができなかつたが、1945年には“*How to Cook and Eat in Chinese*” (John Day Co.) を出版、1954年頃からは、中国婦女の女権概念の変遷に関する史料を収集し編集する作業に従事した。1960年代には台湾の『伝記文学』に自伝の連載を始め、1972年にはそれらをまとめ『雑記趙家』を出版した。翌年には、“*How to Order and Eat in Chinese*” (Random House, 1973) が出版され、同年の中国訪問の際には周恩来に面会し、計画出産に関する活動を行ない中国国内に貢献するよう期待される。アメリカに戻った楊は、元任とともに医者への聞き取り調査や資料収集に力を注いだ。1974年には、『中国婦女的地位』(英名不詳、Beacon Press) が出版されている。

結婚後も、楊は晩年に至るまで、産児制限のみならず多方面にわたり強い関心を抱き、行動しようとする意識を持ち続けていたといえる。これら、楊の著書のすべてが趙元任の翻訳によるものだが、互いの関心事を尊重し知識を共有し支え合う夫婦の一つの形がそこにあったといえるのではないか。

## 5 おわりに

以上、趙元任・楊步偉夫妻の「新式結婚」と、その後の家庭生活における楊步偉の活動を辿りながら、民国時期の知識人夫婦のあり方についてみてきた。彼らは、楊も言及している通り、いかなる理由があつたにせよ、抗戦により祖国が困難な状況にあつた時期に渡米し、その後40年近く帰国しなかつたことや、その恵まれた環境と自由な行動等から周囲の批判を受けることも少なくなかつた<sup>16</sup>。また、文学者のように、その

家庭像や女性観といったものが作品中に投影されるということもなく、留学して医学を学び開業までした女性が結婚し家庭に入ったということで、かえってマイナスイメージが強くなったためか、その後の生活が広く知られることもなかった。

しかし、その実態は専業主婦にとどまらず、医学関連の仕事や料理、手芸、執筆など多岐にわたり精力的に活動していた姿が浮き彫りになった。「新式結婚」のみならず、その後の家庭生活のあり方においても、二人が周囲の知識人男性、女性に与えた影響は大きかったのではないかと、『雑記趙家』から、当時の知識人たちの交流の様子を垣間見ることができ、史料としても興味深い。

「新式結婚」の後、客観的には旧態依然とした夫唱婦隨の関係に収まったかに見えた二人だが、一概にそうとは言えず、楊步偉の生き方を辿ることで、知識人の家庭生活、知識人女性の生き方の多様性が見えてきた。

本稿は、参考史料の性質上、楊步偉の観点到に偏りがちになり、趙と楊双方からの分析が十分であったとはいえない。また、結婚後の二人の長い家庭生活を、民国時期の中国に限定したため、今後は二人の同時代知識人との交流とその影響、渡米以後の家庭生活、女性運動との関わりの有無等といった点に着目して引き続き考察していきたい。

#### 註

- 1 趙新那・黄培雲編『趙元任年譜』（北京、商務印書館、1998年）に、『晨报』の記事のほか、多数の写真が掲載されている。
- 2 周一川『中国人女性の日本留学史研究』国書刊行会、2000年、218頁。
- 3 清華大学の前身の清華学堂は、義和団事件の賠償金（庚子賠款）を利用して作られた留学制度のための予備教育学校で、1911年に設立された。趙元任の渡米は清華学堂の設立より早い1910年だが、制度は同じものである。
- 4 楊步偉は内科と伝染病に興味を持っていたが、監督処から医学を勉強する女子留学生は全員産科を選ばなければならないという政府命令が通達された。

- 5 「森」は、医学を勉強していた親友三人（楊歩偉、林貫虹、李韻嫻）の名前にそれぞれ「木」があることから楊が名付けたものであり、「仁」は林貫虹が亡くなって、三人から二人になったという意味である。それに「森」と「仁」合わせて医学道德の仁を広い森のように広めるという意味もあったという。当初は、楊が院長、李が副院長を務めていた。
- 6 副院長の李は、楊と同様に、趙に対し好意を抱いていたが、趙は楊と恋愛関係になった。李はその事実を受け入れられず、情緒不安定になり休養せざるをえなくなった、と趙は『早年回憶』の中で語っている。これにより、楊は李との共同経営を諦めざるをえず、また渡米が決まっていた趙について行かなければならない状況の中で、医院を朱徽に譲ることにしたのである。楊にとって趙との結婚は、李との決別、そして医院を手放すことを同時に意味するものであった。
- 7 当時、交流していた人物には、劉半農、蔡元培、金岳霖、傅斯年、陳寅恪、羅志希、徐志摩、張幼儀、ラッセル、その他多数の英仏の言語学者らがいる。
- 8 1928年より北京は北平に、清華学堂は清華大学に改称。
- 9 当時、中央研究院の各部門の大半は上海にあったが、元任は、研究機関は東西南北に遍く置くべきで、歴史語言研究所は北平にある方がよいと主張し、初期は北平に置かれた。
- 10 西川真子「民国期中国知識人夫婦における「知」の共有—梁思成と林徽因」（『名古屋外国語大学外語学部紀要』23号、2002年）に、引用と指摘がある。
- 11 この時期における産児制限の受容については、姚毅「母性自決か、民族改良か——1920年代の中国における産児調節の言説を中心に」（『中国女性史研究』11号、2002年）参照。
- 12 サンガー夫人の著作の翻訳書は、『節育主義』（商務印書館、1928）、『美樂之家（原題、生育節制法）』（出版協社、1927）、『性教育的示見編』（北新書局、1929）等多数あるが、いずれも楊歩偉の翻訳ではない。楊が手掛け、商務印書館から出版されたという『女性須知』についてはまだ確認できていないが、中央研究院近代史研究所編『近代中国婦女史中文資料目録』（1995）によれば、重慶の商務印書館から出版された『女子應有的知識』（1944）は楊の翻訳によるものである。
- 13 清華新聞網の「清華園名人故居」の「教我如何不想他」にも、「楊歩偉女史は、清華園と北平市内において積極的に「産児制限」の宣伝を行ない、清華婦女会、教職員会、母親会や北平市女青年会、婦女会等で講演を行なった」という記載がある。
- 14 教育部国語統一準備委員会は委員31名よりなり、趙のほか、胡適、

蔡元培、劉半農、林語堂、錢玄同、周作人らがいた。

- 15 『雜記趙家』には、アメリカに渡った理由として、戦況が激化し、奥地へと研究院が移動せざるをえない状況下で趙が病気になる、そのままでは悪化の恐れがあったこと、また、研究環境が整わず不本意な毎日を過ごしていたが、ちょうどその頃にハワイ大学から招聘の手紙が来たため、一年の予定で渡米を決めたこと等が挙げられている。
- 16 楊步偉『雜記趙家』（伝記文学叢刊之二四）台北、伝記文学出版社、1985年、115頁。

### 参考文献

#### 中国語文献

- 胡適2004『胡適日記全集 第3冊 1921-1922』、台北、聯經出版社
- 清華大学校史研究室1991『清華大学史料選編 第一卷（上）清華学校時期（1911-1928）』、北京、清華大学出版社
- 清華大学校史研究室1991『清華大学史料選編 第二卷（上）国立清華学校時期（1928-1937）』、北京、清華大学出版社
- 清華新聞網：<http://news.tsinghua.edu.cn>「清華園名人故居」
- 楊步偉1979『一個女人的自伝』（伝記文学叢刊之七）、台北、伝記文学出版社（原著は、アメリカで出版された *Autobiography of a Chinese Woman*, by Buwei Yang Chao, put into English by her husband Yuenren Chao, John Day published, 1947. である。『一個女人的自伝』は、主に原著の最初から新式結婚までの部分を中国語に翻訳したもので、原著の結婚以降の部分は『雜記趙家』と重なる記述が多い。）
- 楊步偉1985『雜記趙家』（伝記文学叢刊之二四）、台北、伝記文学出版社
- 趙新那・黃培雲編1998『趙元任年譜』、北京、商務印書館
- 趙元任1997『從家鄉到美国—趙元任早年回憶』、上海、学林出版社
- 趙元任・楊步偉著、張昌華編1998『浪漫人生』、南京、江蘇文芸出版社
- 智効民2004『胡適和他的朋友們』、昆明、雲南人民出版社
- 中国社会科学院近代史研究所1999『胡適及其友人 1904～1948』、香港、商務印書館

#### 日本語文献

- 関西中国女性史研究会編2005『中国女性史入門—女たちの今と昔』、人文書院
- 坂元ひろ子2004「恋愛神聖と優生思想」『中国民族主義の神話—人種・身体・ジェンダー』、岩波書店
- 周一川2000『中国人女性の日本留学史研究』、国書刊行会
- 中国女性史研究会2004『中国女性の一〇〇年—史料にみる歩み』、青木書店

- 張競 1995『近代中国と「恋愛」の発見—西洋の衝撃と日中文学交流』、岩波書店
- 西川真子 2002「民国期中国知識人夫婦における「知」の共有—梁思成と林徽因」『名古屋外国語大学外国語学部紀要』23号
- 西川真子 2004「胡適と江冬秀—民国時期—知識人の家」関西中国女性史研究会編『ジェンダーからみた中国の家と女』、東方書店
- 姚毅 2002「母性自決か、民族改良か—1920年代の中国における産児調節の言説を中心に」『中国女性史研究』11号